

気仙郡金氏小論

菅野文夫

(一九九五年一月二〇日受理)

はじめに

前九年合戦についてはあつち研究蓄積がある。安倍・清原氏、また奥州藤原氏の祖藤原経清などの人々が多様な視点から検討され、蝦夷問題や王朝国家の辺境支配のあり方もさまざまに論じられてきた。

合戦の過程が問題にされるとき、気仙郡司金氏についてもしばしば言及されてきた。ただこれまでの研究を瞥見する限り、金氏にあたえられた役どころは、さしづめ地味な脇役というところか。安倍頼時、清原武則、源頼義といった主役クラスは言うに及ばず、平永衡などのような人物と比較しても、先行研究からはいささか疎略に扱われてきたような印象をうける。地元有力武士の一人で、同様のものは他にもたくさんいた、くらいの理解が一般的だったとするのはい過ぎだろうか。

本稿は金氏についての専論として、その勢力基盤や陸奥国内における地位・立場、さらに安倍氏との関わりなどを考察し、前九年合戦における金氏の位置を明らかにしようとするものである。金氏一族を注視することで、この合戦に新たな側面が見えてくる

のではないか。

また金氏が登場するのは前九年合戦だけではない。奥州藤原氏の時代にも、それどころか戦国期においてさえ、その存在を確かめることができる。全国的に見ても、十一世紀以来延々と地方に基盤をもつて活動を続けたことを確かめられる武士は、珍しい例に属すのではないか。断片的な史料からではあるが、中世における金氏の活動を見きわめたい。

一節 前九年合戦と金氏

一 磐井郡と金氏

前九年合戦における金氏の動勢を、『陸奥話記』の記述にそって順にみてゆこう。¹⁾金氏一族の名が見えるのは、以下の箇所である(傍線部筆者、以下同じ)。

A 天喜四年合戦

而遣気仙郡司金為時等攻頼時、頼時以舍弟僧良昭等令拒之、
為時雖頗有利、而依無後援、一戦退矣、於是経清等属大軍擾
乱之間、将私兵八百餘人、走于頼時矣、

天喜四(一〇五六)年、阿久利河辺での権守藤原説貞子への襲

撃事件を契機に、安部氏と陸奥守兼鎮守府將軍源頼義との間で、ついに本格的な戦闘状態にはいる。頼義は大軍を率いて安部頼時の衣河関に向かうが、すでに頼時に加担することを決っていた藤原経清が、安部氏が国府多賀城を奇襲するとの噂をひろめた。そのため頼義は撤退を余儀なくされるのだが、この時かれは気仙郡司金為時を衣河関攻撃に遣わした。為時は頼時舍弟僧良昭と有利に戦ったが、後援がなかったため一戦して退いたという。戦場がどこか明記されていないが、衣河関と阿久利河のあいだ、磐井郡内の地だろう。

B 安倍富忠への使者

天喜五年秋九月、進国解、言上誅伐頼時之状、臣使金為時・下毛野興重等、甘説奥地俘囚、令与官軍、於是鮑屋・仁土呂志・宇曾利、合三郡夷人、安倍富忠為首、発兵將從為時、而頼時聞其計、自往陳利害、衆不過二千人、富忠設伏兵、撃之嶮岨、大戰二日、頼時為流矢所中、還鳥海柵死、但余党未服、請賜官符徵発諸国兵士、兼召兵糧、悉誅餘類焉、随賜官符、召兵糧発軍兵、

翌天喜五（一〇五七）年、頼義は安倍頼時を南北から挟撃すべく、「鮑屋・仁土呂志・宇曾利」に勢力をもつ安部氏一族の富忠を味方にひきいれようとした。頼義が使者として派遣したのが、やはり金為時である。驚いた頼時は少数の手勢を引き連れて富忠説得に向かうが、かえってその伏兵に射られ、衣河関に引き返す途中の鳥海柵で死亡する。

C 天喜五年黄海の合戦

同年十一月、將軍率兵千八百餘人、欲討貞任等、貞任等率精兵四千餘人、以金為行之河崎柵為營、拒戦黄海、于時風雪甚励、道路艱難、官軍無食、人馬共疲、賊類馳新羈之馬、敵疲足之軍、非唯客主之勢異、又有寡衆之力別、官軍大敗、死者

数百人、

頼時の死を好機とみた頼義は、十一月に千八百余人の軍勢で総攻撃をかけた。頼時の跡を継いだ貞任は、精兵四千余人を率いて磐井郡黄海で迎え討ち、頼義軍を大敗させる。風雪や兵糧不足などもあり、頼義の軍勢は惨憺たるありさまで、かれ自身嫡子義家らわずか数騎に守られて辛くも逃げのびる始末だった。この合戦で貞任が布陣したのが金為時の河崎柵である。気仙郡司為時が頼義の命にしたがって活躍していたのにないして、為行は安倍方の武將として登場する。

D 康平五年合戦

同七日、破関到胆沢郡白鳥村、攻大麻生野及瀬原二柵拔之、得生虜一人、申云、度々合戦之場、賊帥死者数十人、所謂散位平孝忠、金師道、安倍時任、同貞行、金依方等也、皆是貞任・宗任之一族、驍勇驍悍之精兵也云々、

康平五（一〇六二）年秋、頼義は清原武則とその「子弟万余人兵」の援軍を得て、ついに安倍氏を滅ぼすが、この一連の戦いのなかでも頼義にとつてもつとも困難をきわめたのが、小松柵から衣河関周辺にかけての戦闘である。ここで安倍氏側で奮戦した武將のなかに金師道・依方がいた。また頼義がこの年十二月十七日に朝廷に合戦の終了を報告した陸奥国解には、帰降者として金為行のほか金則行・経永の名が見える。

以上、「陸奥話記」の記事を瞥見してきた。頼義方、安倍氏双方に別れて戦った金氏一族だが、これらの記事から窺われるその姿を整理してみよう。

まずは勢力範囲だが、為時が気仙郡司だったことから気仙郡を拠点としたことは明白だが、為行が磐井郡河崎柵に拠ったことから、すでにたびたび指摘されているように、磐井郡も金氏の地盤といつてよい。天喜四年合戦で本隊が国府に引きかえした際、金

為時が衣河にむけて派遣されたのも、磐井郡における金氏一族の勢力をたのんだのだろう。康平五年合戦でも、金師道・依方らが配されたのは小松柵から衣河関周辺にかけての柵だった。磐井郡に金氏が相当の勢力を扶植していたことは疑いない。そしてこの郡は、前九年合戦の全過程を通じて、もっとも重要な意味をもつ地域だった。

『陸奥話記』冒頭の、「六箇郡之司、有安倍頼良者、是同忠良子也、父祖忠頼東夷酋長、威名大振、部落皆服、横行六郡劫略人民、子孫尤滋蔓、漸出衣川外」というくだりはあまりに有名である。もっとも近年の研究からすれば、安倍氏が衣河関を越えて南下をはじめたことが、合戦の直接の原因であるかどうか、にわかには断じがたい。しかしその後の推移をみれば、安倍氏が勢力を奥六郡より南に拡大せよとしたことは確かだろう。黄海での大勝により、安倍氏は「貞任等益横行諸郡、劫略人民、経清率数百甲士出衣川関、放使諸郡、徵納官物」という状況になり、頼義はこれを制することができなかったという。奥六郡の南境衣河を越えれば、磐井郡の地が広がる。

そしてまた、前九年合戦の主要な戦闘は、発端となった永承六（一〇五一）年鬼切部合戦を除いては、ほとんどすべて磐井郡内で行なわれている。既述の天喜四年合戦、天喜五年黄海の合戦にして然りである。とくに黄海の合戦で貞任が金為行の河崎柵に布陣したことは、当時安倍氏は磐井郡内で自前の城柵をもっていなかったことを予想させる。安倍氏の南下は、磐井郡内にすでに確固たる勢力を築いていた金氏の協力を得ることで、はじめて可能となったといえよう。

南下の急先鋒は、頼時の弟良昭だろう。彼がまもる小松柵は前進基地ともいえるべき要塞だが、天喜四年合戦の記事には見えない。建設されたのは黄海の合戦後だろう。ちなみに『吾妻鏡』（文治五

年九月二十七日条）は、安倍頼時の子に「境講師官照」なるものがおり、その城柵を「小松柵」とするが、これは良昭の誤りとしてよからう。とすれば良昭は「境講師」という通称を冠せられていたことになるが、小松柵が安倍氏の支配圏の南を境していたことを暗示している。

磐井郡の重要性は、康平五年合戦の記事を一瞥するだけでも理解されよう。頼義の軍勢と清原武則およびその「子弟万餘人兵」が、栗原郡宮岡に合流したのが八月九日。同十六日に諸陣の編成を終えて磐井郡に出発し、十七日夜から小松柵周辺で戦闘がはじまる。小松柵を落とした頼義・清原武則軍が、「休士卒整干戈、不追攻撃」と、ここで陣容を立て直さねばならなかったところに、如何に激戦だったかが読みとれる。九月五日に進軍を再開し、石坂柵を落とし、翌六日昼より難攻不落の衣河関を攻撃する。清原武則の奇策により、七日には関が陥落し、さらに関の後衛たる大麻生野・瀬原野二柵を破り、胆沢郡南部を制圧した。それからの動きはきわめてはやい。頼義が念願の鳥海柵に入城したのは四日後の十一日。黒沢尻・鶴脛・比与鳥柵を抜いて十五日には厨川柵を包囲、十七日についてこれを落城させ、合戦は終わる。ほぼ一ヶ月間の戦いのうち、磐井郡から衣河関周辺の合戦に大半の時日を費やしている。この地域をまもるのに安倍氏がどれほど意を用いたか理解されよう。

さほど重要な磐井郡であった。そこには、安倍氏以前に金氏が確固たる勢力を築いていたのである。黄海の合戦で、貞任が金為行の河崎柵に布陣したことは再三述べたが、鎌倉中期の成立になる『十訓抄』は為行を貞任の舅とする。後世の説話集の記事ではあるが、首肯される内容である。磐井郡進出には金氏の協力が不可欠であり、かたい絆を結ぶには婚姻はもっとも普通の方法である。為行ばかりではない。康平五年合戦に見える師道・依方も「貞

任・宗任之「一族」だったことを思いおこせば、安倍・金両氏のあいだには以前より濃密な姻戚関係があったに相違ない。頼義方の為時が安倍氏の一族富忠の説得工作に派遣されたのも、そのような事情を背景にしていることであろう。

二 金氏と安倍氏

十世紀以降、王朝国家の全国支配のため、諸国の受領が多数の従者をもたせて下向し、それによって中世的な在庁官人制成立の動きがはじまること、またこれと併行して、国司の軍事力を補完すべく地方軍事貴族が配置され国衙軍制が再編されること、などについてはすでに先学の研究に詳しい。とくに奥羽には、蝦夷に備えるため多数の武人がさまざまなかたちで投入され、そうした武人たちが蝦夷との戦闘をつうじて弓射騎兵としての技量をみがき、中世武士としての精神的風土を形成してゆくことなども、大石直正氏によって指摘されている。藤原経清や平永衡はもちろん、「東夷酋長」安倍氏や「出羽山北俘囚主」清原氏にしても、基本的には王朝国家の辺境対策として位置づけられた武人たちであることは、もはや共通認識になりつつある。かれらはまた陸奥国衙・鎮守府、あるいは秋田城の在庁官人であり、こうした武士たちの利害対立と中世的国衙形成への運動が、前九年合戦の基本的な構図であることもすでに解明されている通りである。

ただ個々の人物をより細かく検討すれば、藤原経清と平永衡は立場が違ひ、彼らと安倍頼時とはさらに異なる。永衡は「前司登任朝臣郎従、下向当国、厚被養顧、勢領一郡」したという。受領の郎党として下向し、そこで所領を得て土着し、国衙に出仕して在庁官人として活躍するのは当時よく見られたケースで、永衡もそのひとりだった。

他方、藤原経清は、『尊卑分脈』がその父頼遠を「下野住人、五

郡太夫」と記すように、関東に相当の勢力を有した軍事貴族の子であり、叔父（頼任の弟）頼清は同じく「従五位下」の位階をもつ貴族であって、従兄弟（頼清子息）頼俊は左近将監、頼俊子息もまた右馬允というように中央官衙での武人貴族としての官職を有する。また、佐藤圭氏「永承二年における五位以上の藤原氏の構成」によって経清が藤原説貞とともに五位の位階を有することが明らかにされており、『奥州後三年記』の「わたりの権太夫」、「尊卑分脈」の「亘理権太夫」の記述が事実であることが確認される。要するに経清は貴族身分を有しており、場合によっては国司と対等につきあえる立場にあった。ちなみに佐藤論文は、阿久利河事件で源頼義に安倍貞任を犯人として訴えた光貞の父藤原説貞も、経清とおなじく五位の位階を有することを指摘する。説貞は「陸奥話記」に「権守」とあり、国衙在庁官人の最上席ということになるのか。経清もまた『尊卑分脈』に「亘理権守」とあり、経清・説貞は陸奥国衙において拮抗する立場にあったことになる。経清が安倍氏方に奔った一因に、ライバル説貞が頼義に接近したこともあるかもしれない。ちなみに説貞の子息光貞については、小松柵攻略のくだりで「將軍麾下坂東精兵」とあって、この父子が関東地方に地盤を有していたことを窺わせる。この点でも経清と説貞はよく似た存在だったといえよう。

このように平永衡と藤原経清・藤原説貞は前者が受領郎党として下向し、後者が地方軍事貴族という相違はあるが、伊具郡（永衡）・亘理郡（経清）など郡単位の所領をもち、国衙に出仕するという点では三者はやはり共通している。しかし彼らが陸奥国でそうした地位を得たのは、前九年合戦をさほど遡る時期ではあるまい。永衡が永承六年まで国司を務めた藤原登任に従って下向してきたこと、経清の父は下総住人だったことなどを勘案すれば、そのようにいうことができる。説貞にしても同様だろう。

本稿が着目してきた金氏は、おそらくはそれ以前に土着していたと思われる。残年ながら金氏の出自は不明としか言いようがない。『類聚国史』によれば天長元(八二四)年十一日に「新羅人辛良・金貴賀・良水白等五十四人、安置陸奥国、依法給復、兼以乘田充口分」とあり、ここにある金貴賀が金氏のはじまりとの想定も可能には違いないが、もとより推定の域をでない^⑩。とはいえ永衡や経清らなどとは異なり、前九年合戦以前にすでに伝統的な陸奥国の豪族の地位を確立していたのは間違いないだろう。その意味で、鎮守府在庁の筆頭の安倍氏と同じである。安倍氏がそのような地位を得たのは十世紀後半のこととされるが、金氏が氣仙郡司として国衙在庁官人の中で重きをなすようになったのも、その頃だろうか。

安倍・金両氏の共通点はそれだけにとどまらない。両者の勢力範囲はともに蝦夷の地に接する。「六箇郡之司」安倍氏は言うまでもないが、金氏の地盤氣仙郡の北には当時まだ蝦夷の村とされた後世の閉伊郡である。前九年合戦が終わってしばらくたったころ、国司源頼俊が清原真衡の軍勢を動員して「衣曾別嶋荒夷・閉伊七村山徒」を遠征したことはよく知られている。安倍氏・金氏ともに蝦夷の地に接する地域を本拠としたことは、両者が藤原経清などよりも早くから陸奥国に勢力をもったことと無関係ではなからう。経清や平永衡の所領はそれぞれ亶理郡・伊具郡と比較的南部にある。安倍氏と金氏が蝦夷に隣接する地に位置したことは、両氏がほぼ同時期に勢力をもつようになったことうらはらの関係にあるのかもしれない。

もちろん相違点もある。安倍氏は「東夷酋長」と俘囚あつかいされることがあるが、金氏にその形跡はない。奥六郡と氣仙郡との差によるものだろうか。いうまでもなく奥六郡は征夷を目的とする鎮守府の管轄下で、蝦夷との境界的な領域として位置づけら

れていた。氣仙郡は比較的早期に建郡された、国衙が直接支配する「内国」である。このことと表裏するが、鎮守府在庁と多賀城の国衙在庁官人という相違も、両者の扱いが異なる要因だったはずである^⑪。ただし、このような区別は基本的には『陸奥話記』の作者、あるいは中央政府の官人たちの観念の上につくられた、一種の虚構であることを忘れてはならない。現実には、これまで述べたように、両者は伝統的豪族として国内における政治的地位が共通しており、また婚姻などを通じて濃密な関係を取り結んでいたのである。

金為時が源頼義の使者として、安倍富忠を味方にひき入れるために派遣されたことを、あらためて考えてみよう。すでに高橋崇氏は、この富忠説得工作が為時自身の立案であり、為時は「おそらく海路、三陸沿岸を北航し青森県八戸市辺で上陸するというルートをとった」と指摘している^⑫。従うべきであろう。富忠は鮑屋・仁土呂志・宇曾利を勢力範囲としていたという。現在の岩手県北部から青森県東部にかけての地域、中世のいわゆる糠部郡に相当する。国府からこの地へ向うには、陸路によるとすれば北上川流域をさかのぼる後世の奥大道をつかうことになるが、これこそ奥六郡を縦断する道であって安倍頼時の勢力範囲の中核部分である^⑬。上陸地点はともかくも、為時は現在の三陸沿岸を北上したと考えるのが妥当だろう。そしてこの海路は、この時はじめて開かれたものではなからう。金氏と、安倍氏と、そして「閉伊七村山徒」をふくむ奥地の俘囚たちをむすぶ海の世界として存在していたのではなからうか。しかもこの世界が後世にも引き継がれていたのではなからうか(これについては次節であらためて述べたい)。

以上、憶測を重ねてきたが、これまでの論述のまとめとして、金氏にとって前九年合戦とは何だったのか考えてみたい。

安倍氏の勢力が南下するにしたがつて、金氏一族は厳しい選択をせまられたはずである。蓋し当初は、安倍氏との従前よりのむすびつきから、協力する方策を選んだことだろう。さきにふれた金為行女と安倍貞任との婚姻は、金氏のそうした態度の表現かもしれない。しかし源頼義の国守補任は、新たな波紋を投げかけた。頼義と安部頼時との対立・緊張関係のなかで、いずれの側につくべきか、命運をかけた岐路に立たされる。為時が気仙郡司の地位を確保したのは、頼義に積極的に接近したからではなからうか。他方では安倍氏とのつながりを重視する為行らがいる。むしろ『陸奥話記』に見える限りでは、安倍氏方に属した人々の方が多数派だったかもしれない。金氏一族に深刻な分裂の危機がおとずれる。前九年合戦は、金氏にとっては自らの拠点で一族すべてが相い争うという戦いだった。

もし金氏が安倍氏と結ばなかったならば、安倍氏は磐井郡進出が困難となり、合戦の様相は相当に異なるものとなつたろう。逆に為時のように国衙方につくものがなかったならば、頼義はさらに苦戦をしいられたに相違ない。前九年合戦における金氏の役どころは、ただの脇役ではなかったのである。

二節 その後の金氏

一 奥州藤原氏と金氏

『陸奥話記』を除くと、金氏に関するまとまった史料はない。ただそれでも十二世紀、奥州藤原氏の時代については、多少はその動勢を窺うことができる。

「中尊寺経蔵文書」に、天治三（一一二六）年三月二十五日付けの経蔵別当職補任状案なる文書がある。自在房蓮光は「往古私領骨寺」を中尊寺経蔵に寄進し、また「金銀泥行交一切経」書写事

業に大きな功績を挙げた。これにより蓮光をして経蔵別当に補任し、骨寺村などを永代を限り蓮光相伝に任せる旨を記す。発給者は行上に署判を据える奥州藤原氏初代清衡だが、坂上季隆・金清廉・僧俊慶が連署している。季隆・俊慶が何者かわからないが、この金清廉こそ、これまで述べてきた金氏一族につながる人物たることはいうまでもない。

もつとも本書は補任状としては異例の書式であり、その文言・内容も疑問がないわけでもない¹⁷⁾。しかしすべてが後世の創作というわけでもなからう。少なくとも金氏についていえば、清衡の段階で藤原氏家臣団に組織されているものがない¹⁸⁾、なんら不思議ではない。藤原氏こそは、衣河を越えて磐井郡平泉に居を据えた。金氏と没交渉ではあり得ない。

磐井郡域に黄海・奥玉・興田といった保があることも注目される。藤原清衡が千僧供養の費用調達を名目に、比叡山とむすんで七百町もの地を強引に立保しようとし、国司と対立したことはよく知られている（『中右記』大治二年十二月十五日条）。清衡が陸奥北部における中世的郡郷制編成の推進役としての役割を果たしたことについては、遠藤巖氏の指摘もある¹⁹⁾。磐井郡域の保の成立時期はおおむね十二世紀とされているが、奥州藤原氏による立保と考えてよからう。そして実際に開発にあたつた人物は、従来よりこの地域に勢力をもつ金氏を攔いて考えられない。摂関家領荘園にして奥州藤原氏が管理していた高倉荘も栗原・磐井郡をまたがるかたちで立荘されているが、藤原氏は中世的な郡・郷・保の設定を進める過程で、地元有力者と主従関係を結んでいったことだろう。金氏と藤原氏との関係は、そうしたことから理解される。

金氏が藤原氏家臣団に組織されていたことは、藤原氏が滅亡する時期の史料にも窺うことができる。文治五（一一八九）年七月、

源頼朝は奥州に向けて進軍し、八月八日に奥州藤原氏が設けた最大の防衛拠点である伊達郡阿津賀志山要害の攻撃を開始する。三日にわたる激戦の末、頼朝軍はついにこれを破る。その後ほとんど戦闘らしい戦闘もなく、奥州藤原氏は滅亡するのだが、この阿津賀志山の合戦において、「泰衡郎従」の「大將軍」として金十郎の名が見える。金氏が藤原氏の主従制のなかにあつて、それなりの重きをなしていたことが知られる。

しかし一族のなかには、国衙在庁官人として国司に従うものもいた。陸奥守藤原師綱が国内の検注を行なった際、藤原氏二代基衡は信夫郡の郡司大庄司季春に命じてこれを妨害させた。国司は検注を強行しようとして季春と合戦となり、双方に犠牲者がでるまでになった。師綱が思ひのほか強硬だったことに驚いた基衡は、自らは事件に無関係であり、季春一人の罪ということにして、彼を師綱に差し出した。基衡は季春の助命を求めて師綱の館に美女を遣わし、また砂金一万両を献上したが、師綱は法にしたがつて季春を処罰したので、ひとびとはその廉直さを讃えたという。鎌倉期成立の『古事談』に載せる説話だが、師綱が季春を斬罪に処す場面は、次のように描かれている。

季春已召取早賜御使、於其前可刎頭云々、依之国司遣檢非違使所目代云、季春已將出タリ、四十余計男肥満美麗ナルガ、積遠歴水干小袴二紅衣着タリ、打物取タル者廿人許圍繞之、切手ハケセンノ弥太郎ト云者也、出立擬切頸之間、大庄司云、切損ナ、刀ハイツレゾト問ケレバ、切手云、鬼次郎大夫ガ大津越ゾト云ケレバ、サテハ心安ト云テ被切ケリ、

季春は檢非違使所の役人にひきわたされ、「ケセンノ弥太郎」によつて斬られたとある。「ケセン」は氣仙で、この人物は金氏一族と見てよからう。彼は国衙檢非違使所の役人であつた。基衡時代においても、金氏のなかにはこのように奥州藤原氏と主従関係を

結ばず、国衙在庁官人として活躍する人物もいたのである。

二 室町・戦国期の金氏

奥州合戦がおわり、また翌文治六（一一九〇）年に大河兼任の乱が鎮圧されると、奥州藤原氏時代の武士はひとしなみに所領を追われ、関東に本領をもつ鎌倉御家人たちがその地頭職を得ることとなった。そのため、鎌倉以降戦国期に至るまで、奥羽で活躍する武士の中に、平安期以来の系譜をもつものを捜すことはきわめて困難である。もちろん藤原氏時代の武士がすべて山林に交わり、没落して根絶やしになったわけではなからう。新たに地頭職を得た関東御家人のもとで地頭代となり、あるいはその又代官となつて生きのびたものもすくなくなつたに違いない。しかし残念ながらその動勢を知ることが、ほとんど不可能に近い。史料上の痕跡があまりに乏しいからである。

金氏にしても当然のことながら、従来の地位を失つたはずである。葛西清重は奥州合戦での拔群の勲功により、文治五（一一八九）年に奥州総奉行に任じられ、さらに牡鹿・磐井・胆沢・江刺・氣仙郡と興田・黄海保の、いわゆる五郡二保と称される広大な郡・保の地頭職を得た。これらのうち、磐井・氣仙二郡はいうまでもないが、興田保と黄海保も、立保に金氏が関与していた可能性が大であることは先述の通りである。つまり、葛西氏の所領は金氏のそれをすっぽりと覆うかたちで設定されたことになる。もっとも葛西氏が五郡二保の地頭となつたといつても、ただちにこの地域に移り住んだわけではない。葛西氏の所領支配のしくみは明らかではないが、この時期の他の地頭と同様、一族や郎従を地頭代として派遣し、在地の支配を行なつたと考えるのが自然である。その地頭代ですら、関東の本領や鎌倉と任地とを往復していたのであつて、任地に腰を落ち着けていたのではなからう。こうした

状況で地頭支配を実現するためには、現地に根を張った伝統的な有力者を地頭の又代官として取り込み、その力をかりることが是非とも必要になる。金氏がその役についたことは容易に想像できるが、しかしそのことを明示する史料はないのである。

このように金氏は歴史の表舞台から姿を消したかにみえるが、鎌倉幕府が滅亡し、奥羽に新たな時代がもたらされた時に、突然史料の上にその姿をあらわす。岩手大学附属図書館所蔵「宮崎文書」のなかに次のような書状がある。

しらかわのミかわとのの御状しんせしめ候ところに、いそきまいれと、おほせかふり候処ニ、当郡の地頭中島弥太郎殿くたられて候間、くにのこさいの事をも、可被尋之由おほせ候ほとに、いそきまいらす候、弥次郎をまいらせ候へハ、御代官をもて、かのところをうちわたして給候へく候、ひまあき候ハ、いそきまいり候て、是駄のおそれをも可申入候、恐惶謹言、

二月廿一日

金頼清（花押）

進上 糠部御奉行所

書状のならいとして年号が書かれていないが、関連文書から建武元（一三三四）年と知られる。差出人の箇所に金頼清の名とその花押がくろぐろとしたためられている。奥州の武士でほかに金を姓とするものはなく、気仙郡司金氏の流を汲む人物としてよからう。

鎌倉幕府は前年五月に倒れ、翌月には後醍醐天皇が主宰する建武政権が成立していた。十月には陸奥守北畠頭家が後醍醐子息義良親王を奉じ、多数の武士・官僚を伴って国府に着任し、奥州の掌握にのりだす。頭家は国府の出先機関として各地に郡奉行所を設置したが、この時糠部郡奉行に任じられたのが、甲斐国南部郷を名字の地とする南部師行である。彼の任務は陸奥北部を軍事的

に制圧し、北条氏残党を搜索・逮捕するとともに、新政府に協力した武士たちにも新恩地を打渡すことだった。右の書状も、糠部郡奉行所のそうした活動のさなかに出されたものである。

「しらかわのミかわとの」は北畠氏の信任厚い結城親朝で、その「御状」とは金頼清に新恩地を給付するという内容の文書だろう。これを糠部郡奉行所に提出して打渡を申請したところ、奉行所では頼清の出頭を求めた。しかし頼清は下向してきた「当郡の地頭」中島弥太郎にも呼び出されているため、すぐには行けない。そこで弥次郎を代理に遣わしたので、よろしく打渡していただきたい、というのが右の大意だろう。上所に「進上」とあり、中小武士としての頼清の立場が窺われる。

ただ、頼清が打渡を求めた「かのところ」がどこなのか、また「当郡」とあるのはどの郡を指すのか、そこが問題である。中島弥太郎なる人物についても他に史料がない以上、状況証拠から推測するしか手はない。

十一世紀以来金氏が蟠踞していた気仙郡・磐井郡がまず念頭に浮かぶが、この地域はすでに述べたように葛西氏が地頭職をもっていた。葛西宗清・清貞父子は北畠氏の国府に忠実で、鎌倉期以来の所領を保持していた。当然のことながら、気仙・磐井両郡は糠部郡奉行所の管轄範囲ではない。「当郡」も「かのところ」も、糠部奉行所の管轄地である糠部・鹿角・久慈・閉伊郡および遠野保のうちのいずれかということになる。これ以上を絞り込もうとすると、憶測をたくましゅうせざるを得ないが、あるいは閉伊・久慈・糠部郡の海岸地域ではなからうか。

閉伊郡の北の久慈郡は、室町・戦国期に久慈氏が勢力をもっていた。久慈氏の出自は近世の史書・系図類の正統的な説明によれば、南部氏の祖たる光行の三男朝清の後胤という。しかし『奥南旧指録』には「久慈氏。本名昆氏、御譜代並になる」ともある。

何とも興味深い記述である。昆は金に通じ、久慈を名字とする武士のなかに金氏の出自のものがいたことになる。氣仙・磐井郡の金氏が、現在の三陸海岸を北上して久慈郡に土着したのだろうか。前節で金為時が安倍富忠を説得しに海岸沿いに向ったことを述べたが、十一世紀にすでにあった三陸沿岸の海の世界とそこで活躍する金氏は、その後も健在だったと考えてよいのではなからうか。金姓久慈氏の存在はこのことを裏付けるものだろう。

ただし右の金頼清書状とほとんど同時期に、久慈郡は元弘没収地として二階堂行朝に与えられ、その打ち渡しを南部師行に命じた北畠顯家の国宣が残されている。²⁸したがって、頼清書状の「当郡」を郡全体ではなく、郡地頭職が分割されたいわゆる一分地頭職を単位とする所領と考えても、これを久慈郡内に求めることは難しいかもしれない。

ところで『源平盛衰記』は、平重盛が陸奥国を知行していたとき、氣仙郡から進上された金一二〇〇両を供養のため大唐国阿育王山に送ったというエピソードを載せている。²⁹氣仙郡の産金は夙に著名だが、この伝説にまつわる話が、閉伊郡の北部海岸地方、現在の岩手県野田村に残されている。ここにある無量山海蔵院の開山は珊光国師なる中国僧で、平重盛への返礼のため阿育王山から日本に遣わされたが、航海の途中難風に遭遇しこの地に漂着したという。³⁰もとより海蔵院の伝承のおこりがどこまで遡れるのか心もとないが、氣仙郡にまつわる中世の伝説の後日譚が閉伊郡に伝えられていることを、たんなる偶然に帰してしまうのは惜しいように思われる。

ともかくも金氏の痕跡を現在の三陸海岸北部に見いだすことは可能であり、この海の世界に展開される金氏の活動を構想することとは、あながち無理ではなからう。閉伊・久慈郡といえは糠部³¹とならぶ馬産地として知られ、多くの牧がおかれたところだが、海

岸地域には金氏一族が蟠踞する海の世界が広がっていたのである。

ところで陸奥北部の海の世界に活躍する領主といえば、安倍姓安藤氏が著名である。鎌倉期には津軽の地頭職をもつ北条氏の代官として蝦夷の沙汰を行ない、津軽から糠部、蝦夷島、出羽小鹿島、さらには若狹まで幅広く活動していたことについては、すでに多くの研究蓄積がある。³²ただこれまでの研究で着目されてきたのは、日本海側での活動であって、太平洋岸での活動についてはさしたる指摘がない。そのなかで大石直正氏が、海を舞台に活躍した「安藤を名字とする一族が」太平洋岸の牡鹿半島あたりまで「かなり古くから蟠踞していたことは確か」としていることが注目される。³³大石氏のいうように安藤氏が太平洋岸にも活躍していたとすれば、当然本稿で取り上げた金氏ともながしかのむつづきが予測される。次に紹介する史料は、その予測を裏付けるものだろう。

四家之相分は、七平・八源・九橘・十藤と申し候、…(中略)
 ；藤原ハ二条関白一流、金・若生・安倍・佐藤一流、上杉・伊達は一そう、山内・小野寺一ソウ、宇都宮・留守一ソウ、小山・白河・登米・八幡・国分は一ソウ、鎌足大臣十番目子二て氏家一流、故二十郎とかうす、

永承十一年成立とされる『余目氏旧記』の最後の部分で、源平藤橘のいわゆる四姓を奥羽の諸家にそくして説いた箇所である。

「金・若生・安倍・佐藤」が記載されていることから、金氏がこの時期においてもなお奥州武士としての地歩を保持していたことがわかるが、そのこと以上に注目すべきは、金氏が安倍氏と「一流」であるという点である。いうまでもなく安倍・金は、若生・佐藤と異なり、氏の名称、いわゆる本姓であって名字ではない。だから金氏・安倍氏が藤原氏の支流であるというのは明らかに事

実に反する誤った認識である。しかし誤りであれ、それが当時の奥羽の武士たちの通念だったことは興味深い。金氏は安倍氏すなわち安藤氏と同族と理解されたのである。

ちなみにこうした認識は近世の系図にも見られる。『岩手県史』が紹介する奥玉村（現岩手県千厩町）および天狗田村（現同大東町）の旧家に伝えられた「安倍姓金家氏系譜」「安倍姓金家氏系譜」は、その好例だろう。残念ながらいまだ実見する機会を得ないが、内容から近世中期以降の作と推測されるが、ともに鎌倉初期の金十郎為俊を祖とする。為俊は文治五（一一八九）年奥州合戦で幕府軍の追撃を遁れて山中に逃げ込んだが、大河兼任の乱に幕府に属して勲功をあげ、頼朝より罪をゆるされ、所領を安堵された、という。為俊を金十郎とするのは、さきに述べた『吾妻鏡』に登場する金十郎を念頭においた創作かもしれない。しかしそれにしても金氏を堂々と「安倍姓」と称している点は面白い。しかも為俊の室を「安倍家村女」として、安倍氏との関わりをことさらに強調しているのである。安倍氏と金氏とが觀念の上では融合しているといっても過言ではなからう。大石氏はさきの論攷で、牡鹿郡十八成組給分浜見明院の「風土記御用書出」に見明院先祖として安藤太郎重光・安藤四郎などの名が見えることを紹介しているが、あるいはこの安藤氏も、金氏一族と深くむすびついていたのではなからうか。

むすびにかえて

冗漫な論述となったので、本稿がとくに力説したい点だけを少しくまとめておこう。

十一世紀において金氏と安倍氏は、一方は国衙に、他方は鎮守府に出仕するという相違はあるが、ともに蝦夷の地に接する所領

を有し、かつ族縁的にも濃密にむすびついていた。このむすびつきは、金氏の勢力範囲である磐井郡と安倍氏の奥六郡とが衣河を挟んで隣接するという事情にもよるが、同時に陸奥北部の太平洋岸の海上交通の存在も重要である。この海の道を通じて、金氏の活動は安倍氏と連係しつつ、閉伊・久慈・糠部、そして蝦夷島までの北方世界が広がっていたのではあるまいか。金氏のこうした勢力と活動は、奥州藤原氏の時代になっても一層の展開を遂げたことだろう。

奥州合戦後、金氏は表面的にはかつての地位を失う。葛西氏をはじめとする関東武士の代官・又代官的な存在に甘んじることになるが、しかし海の世界を媒介とするネットワークは、安倍（安藤）氏とのむすびつきを維持しつつその後綿々として陸奥国の中世に存続していた。

乏しい史料をもとに、後世の伝承までを動員し、憶測をつらねての結論である。論証としての厳密さに欠けることは否めない。しかし金氏と安倍氏とによる三陸沿岸の海の世界が存在した可能性は捨てがたいものがある。

注

（岩手大学教育学部）

（1）本節の引用文は、とくに断わらない限り『陸奥話記』（梶原正昭校注、現代思潮社）からのものである。

（2）高橋崇「蝦夷の末裔——前九年・後三年の役の実像——」（中央公論社、一九九一年九月）六七頁など。

（3）高橋前掲は、永承末年に磐井郡に小松柵・石坂柵などの安倍氏の柵がすでに存在し、安倍氏の勢力がさらに南に及んでいたと述べている（六九頁）。従いがたい。

（4）なお、『吾妻鏡』の「官照」と良昭を同一人物とすること、同一の施設を「柵」と「楯」の両用に標記することなどについて

ては、大平聡「堀の系譜」(佐藤信・五味文彦編『城と館を掘る・読む―古代から中世へ―』(山川出版社、一九九四年、七六頁)に詳しい。また「境講師」の通称の意味については、同氏のご教示による。

(5) 巻六・十七に、この黄海の合戦について、「天喜五年十一月に、五千三百騎の兵を、ここして、おそいよりけるに、貞任等四千余騎をあつめて、しうと金為行が河堰のたちにこもりて、是をふせぐ時に」というくだりがある。

(6) この当時の国衙軍制についても近年の研究は少なくないが、ここでは石井進「中世成立期の軍制」(同『鎌倉武士の実像』平凡社、一九八七年)を挙げておく。

(7) 大石直正「中世の黎明」(小林清治・大石直正編『中世奥羽の世界』、東京大学出版会、一九七八年)、一四―一八頁。また東国武士と奥羽との関係について近年の論攷としては、野口実「十一―十二世紀、奥羽の政治権力をめぐる諸問題」(古代学協会編『後期撰関時代史の研究』吉川弘文館、一九九〇年)にも興味深い指摘がある。

(8) 大石前掲注(7)論文、一八頁。また同「奥羽の荘園と前九年・後三年合戦」(『東北学院大学論集』歴史学・地理学第一七号、一九八六年)、一一―一三頁。

(9) 『年報中世史研究』八(一九八三年)、一〇四頁。

(10) 『宮城県姓氏家系大辞典』(角川書店、一九九四年)「金氏」の項に、すでにその指摘がある。

(11) 大石前掲注(7)論文、四頁。

(12) 書陵部所蔵「御堂撰政別記裏文書」応徳三年正月二十三日源頼俊申文(『平安遺文』九卷四六五二号)。

(13) 安倍氏及びその後胤とされる安倍姓安藤氏が、国家の政策上「蝦夷」と認識されていたことについては、遠藤巖「中世国家

の東夷成敗権について」(『松前藩と松前』九、一九七六年、一三頁)以来の指摘がある。

(14) 高橋前掲書、一二二頁。

(15) 実際、富忠の離反を知った頼時はこの陸路をつかって説得におもむき、伏兵にあつてひきかえす途中島海柵で死去している。

(16) 『平安遺文』五一―二〇六一号、『奥州平泉文書・新訂版』(岩手県教育委員会編、国書刊行会、一九八五年)十二号。

(17) 『奥州藤原史料』(東北大学東北文化研究会編、吉川弘文館、一九五九年)も、「この文書にはかなり問題がある」としている。

(18) 最近、平泉都市論をめぐる清新な論攷が多く発表されているが、そのなかで前川佳代「平泉の鎮守」(『古代文化』四五巻九号、一九九三年)は、平泉の都市空間の東をまもる東方鎮守を北上川対岸、現在の平泉町長島地区に求め、その背景として金氏と藤原氏との関係に着目している。

(19) 遠藤巖「秋田城介の復活」(高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館、一九八六年)五七五頁などを参照。

(20) 『角川日本地名大辞典・岩手県』、黄海・奥玉・興田の各項目参照。

(21) 『吾妻鏡』文治五年八月十日条。

(22) なお、『十訓抄』下第十にも同様の説話を載せるが、「ケセンノ弥太郎」の記述はない。

(23) 入間田宣夫「鎌倉幕府と奥羽両国」(前掲『中世奥羽の世界』、五一頁)。

(24) これについては『角川日本地名大辞典・岩手県』、気仙郡の項がすでに指摘している。

(25) 『岩手県中世文書』上巻、一〇五号。また筆者は以前に本書についてふれたことがある(『糠部郡奉行所』の「断面」昭和六一―六二年度科学研究費補助金・総合研究A・研究成果報告

書『北日本中世史の総合的研究』、一〇—一四頁。

(26) この間の経緯については、遠藤巖「南北朝内乱の中で」(前掲『中世奥羽の世界』)に詳しい。

(27) 『南部叢書』二巻所収。なお、これについては『角川日本地名大辞典・岩手県』、久慈郡の項がすでに指摘している。

(28) 『遠野南部文書』元弘四年二月十八日北畠顯家袖判国宣(『岩手県中世文書』上巻一〇五号)。

(29) 卷十一「育王山送金事」。

(30) 『大南部野田領誌』。

(31) この点については、入間田宣夫「久慈・閉伊の驛馬」(『中世東国史の研究』東京大学出版会、一九八八年)に詳しい。

(32) 夥しい研究があるが、近年の代表的な論攷として遠藤巖「蝦夷安藤氏小論」(『歴史評論』四三四号、一九八六年)を挙げておく。

(33) 大石直正「奥羽の荘園公領についての一考察」(前掲『東北古代史の研究』所収)、五〇八頁。

(34) 『岩手県史』二巻、六八頁。